

学長室で1時間

永井和之 総長・学長

Kazuyuki Nagai

鈴木敏文 理事長に聞く

Toshibumi Suzuki

現代学生論

学生時代 at 駿河台

——「駿河台はよかった」「多摩と駿河台は違う」などという言葉を、年配の学員からはよく耳にします。また、一般論として今の学生は……という話もありますが、おふたりにご自身のエピソードを交えながら、日ごろ感じていらっしやる学生観や

学生論をお話しただきたいと思えます。

鈴木理事長は、聞くところによると学生時代は政治の世界に関心があつたようですが。

鈴木敏文 子供のころは、両親が町長や婦人会などを務めていたから、政治家がよくわが家に出入りしていました。そのためか、高校では生徒

会長をやったり、中大に入ってからも推されるままに自治会の書記をやったり。そんなことをやって、多少政治に興味を持っていたのです。入学

してからは、授業にきちんと出たらそれ以外は時間があると国会に遊びに行っていましたよ。

——「国会に遊びに行っていた」というのは、興味深いですね。今で

こそ議員インターンシップなどで、学生もそういう世界が身近になってきました。が、学生運動が激しかったその当時では珍しかったのでは。

鈴木 いや、そうでもなかったよ。当時の自治会メンバーは国会議員とつながりが深かったし、卒業してから代議士の秘書になった人も結構多かった。まあ、当時の学生運動は左右が対立していて、そういう意味では与野党のような対立が学内に入り込んでいた。

——学長はそういう政治の世界は？

鈴木 学長は勉強ばかりしていたから（笑）。

永井和之 理事長から言われてしまったけれど、2年の夏から司法試験の勉強を始めて、研究室に入っていたので、それが思い出かなあ。

——いま理事長の話をうかがっていて、かつては神田・駿河台に校舎があつたので、例えば国会などへも気軽にいこうか、身近かだったんだなあと思います。多摩では、授業がないから国会へ行ってみよう、とは

なかなか……。

鈴木 確かに駿河台は繁華街で、本屋があるとか、遊びに行くにも都心だから便利だった。でも、授業といたら学長の時代もそうだと思いますが、小さな教室にすし詰めですね。学習環境は多摩のほうがはるかに整っていると思いますよ。

永井 そうそう。廊下を押し合いへし合い歩くので、ラッシュアワーの電車みたい。そのぐらい学生がいたんですよ。

その点、多摩は環境的にどうですか。いいでしょう。

《中央大学の学生数のピークは駿河台時代の1973年（昭和48）の3万8399人。最新05年5月の学生数は2万5725人、となっている》

私（岩倉）は高校も自宅も東京23区内だったので、反対に中大の環境に憧れて入学しました。多摩は安心するとか、好きな環境です。

そう言えば、駿河台の頃は女子学生は少なかった時代ですね。今は6学部全体の平均でも女子が3割超だ

そうですが。

永井 そうですね、そこが今とは大違い。僕のクラスには女性が3人いたかな。それでも多いと言われた。クラスと

いっても1クラス50数人いた時代。たった3人

でも、他クラスの男子学生から羨ましがられたんですよ、「おまえのところは

多いな」って(笑)。

——それではきつと……:~:なにか素敵な出会いもあったとか。

永井 いや、私はありませんよ(笑)。

鈴木 僕は学

生時代、経済学会に入っていました。経済学会は他大との交流が盛んで、僕がテーマとしていた近代経済学で

は、東大、一橋、早稲田、慶応、中央の5大学インターゼミといって、各々の学校を交代で回りながら一つ



学生への思い、中大生への期待を語る鈴木敏文理事長（左）と永井和之総長・学長

ます。どこかお互いに見たような顔だなと。どちらかが、「あなた近経（近代経済学）インターゼミに入っていましたか」と聞くと、「入っていた」ってことも結構あってね。銀行員とか商社マンとか様々な職に就いている人がいました。この交流は駿河台台からできた、ということではないけれど、振り返ると学生時代の大きな思い出につながりますね。

滝沢 学長は司法試験をずっと勉強されていて……。

永井 それだけ。(笑)それだけっていうことはないけれど、大学2年の夏以降はそれが中心です。

鈴木 当時はお茶の水にもいろいろな司法試験の研究団体があつて、泊まり込みでやっていた人もいたでしょう。

永井 やっていた人もいますね。

すごい人たちが大勢いましたよ。私は朝9時から夜9時ぐらいまでを基本にしていたけれど、9時に行くともう勉強をやっていて、帰る時にもまだやっている。いろいろなあだ名がついているのがいました。僕の同

のテーマをみんなで扱っていた。卒業して、何年も経ってからのいろいろなところで再会したこともあり



ながい・かずゆき

1945年生まれ。中央大学法学部法律学科卒業。同大法学部助手、助教授をへて、81年から教授（商法）。99年—03年法学部長。通信教育部長、学校法人中央大学選任評議員、理事などを歴任。05年11月中央大学学長、同12月総長に就任した。

期でも私が見ているかぎりはずっといる「ミスター不動産」というのがいて。机および椅子の定着物と言われている（笑）。

は？ ——— ちなみに学長のニックネーム

永井 ニックネームは特にないですね。

今の学生・昔の学生

——— 今の学生とかつての学生を比べると、今のほうがある意味で真面目になっているというか、危機感があるような気がします。昔の学生はもつと、のんびりと生活していたような。

鈴木 僕は長い間会社で人事を担当していたから、高校や大学にも、もちろん中大の就職部（現・キャリアセンター）にも学生募集に来たり、面接をしていました。面接などをすると、もちろん人によるけれども、「君、学生時代は何をやっていたの」と聞くと、最近の学生から返ってくる答えは「交友関係をつくるために」とか、「遊ぶために」とか、あんまり勉強していたとは言わない。そういう点から見ると、われわれの時代の方がみんな真面目に勉強していたように思うけど、今の学生はどうなの。

——— あくまでも僕（滝沢）の印象で言えば、インターンシップなど学

外で活動している学生は増えてきているのかなど。その一方で、ある意味で昔ながらというか、古き良き学生のように悠々自適に過ごしている学生もいる。学生の中でも意識の二極化を感じています。

鈴木 今も昔もアルバイトをしながら苦学して勉強している人も結構多いと思うけど、今は実際にアルバイトをして自分で授業料を賄っている人はどのぐらいかな。

——— 私（岩倉）の周りには結構います。また、奨学金を受給しながら自分でも生活費を稼いでいる友人もいます。自分で学費を払うようになると、真面目に講義を受ける印象があります。そういう人たちのほうが、意識が高い印象もあります。

鈴木 昔から中大の場合は、苦学する人の割合が結構多かったけれど、なかにはアルバイトをするために学校に来ている人もいたかな。でも、みんな一生懸命生きていましたよね。永井先生の場合はどうだったの。

永井 理事長が大学に入られたのは？

鈴木 僕は昭和27年。長野から東京へ出てきて最初に下宿したのが渋谷の恵比寿だった。バラックみたいなものは建っていたけれど、あそこはまだ一面の焼け野原みたいでした。

永井 27年……私が7歳の時ですね（笑）。爆弾で穴が空いたビルがあつたり、焼夷弾のちよつと錆びたようなものが野原に落ちていたり。

鈴木 その当時は食堂へ行つても、田舎から出てきているために外食券がないと食事ができなかった。田舎でお米の配給があると、その代わりに外食券をもらつたんです。町の食堂でもその券を持ってないと食べられない。

永井 その頃は、「米穀手帳」がないとお米が買えなかった。

鈴木 僕らの下宿では、下宿の条件がお米を1カ月に1斗持つてくることだった。1カ月の下宿代が1500円か2000円ぐらいになるのかな。3食賄い付きで、だからお弁当も必ず下宿のおばさんがつくってくれた。

——— 苦学生が多いという話に学長



すずき・としふみ

1932年生まれ。中央大学経済学部卒業。セブンイレブン・ジャパン社長、イトーヨーカ堂社長などをへて現在セブン&アイ・ホールディングス会長兼CEO。勲一等瑞宝章(03年)など受章。05年11月、学校法人中央大学理事長に就任した。

も頷かれてきましたが、年代が違っても同じような実感ですか。
永井 過半数まではいかなくても、苦学生はまだかなり多かったと思います。僕が入学したのは昭和39年、東京オリンピックの年です。昭和30

年代の高度成長期が終わっていたから、いま話をうかがっていて理事長の時代とは相当違うなと感じました。高度成長期が終わっていたから、裕福な人はかなり多くなっていました。が、中大の場合はそれほど裕福でない学生層もかなりの比率を占めていた感じがあります。

鈴木 中大のモットーは「質実剛健」だから、地方から上京した苦学生は多かったですよ。今はどうでしょう。

——僕の周辺の仲間でも、新聞配達をしながら大学に通っているというのがあります。ごく少数ですけど。

かつてはスポーツ王国だった

鈴木 僕らの時代の中大のもう一つの特徴は、みな運動が強かった。正月の箱根駅伝ではいつも優勝するし、相撲も、野球も強かった。スポーツといえば、だいたい強かったですね。

永井 中大はなぜ強かったのでしょうか。オリンピックにもよく出ていた。

鈴木 そうそう、レスリングや柔

道も。

永井 柔道では、東京五輪で岡野(功氏Ⅱ中量級)が優勝しています。金メダル。

鈴木 全体的に強かったですね。むしろ、中大は強いものだと思っていた。

——背景的な要因としては。



岩倉記者(左)と滝沢記者

鈴木 強いから、実力ある選手が集まってきたんでしょう。

——スポーツが強いから中大に行こう、という魅力もあったんでしょうね。

鈴木 そういう魅力もあったからこそ、いま大学としてもスポーツに

力を入れて、運動部を強くしようとしているわけです。

——それはうれしいです。今年は箱根駅伝がちょっと残念でしたが。

鈴木 そう、残念だったけどね。

永井 陸上部の部長としても、言葉がありません。

鈴木 今は都心がいいとか、多摩のように都心から離れた場所がいいとかいう話もあります。確かに、最近の一部の大学で都心回帰と言われているのも事実です。地の利は事実だけでも、われわれ経営陣にとつては「ここ(多摩)にあるが故の魅力」をどれだけ出せるか、ということだと思っています。もつと魅力をつくっていかねければなりません。

教授陣にしても、「中大にはあの教授がいる」と言われるように、もつと自分を売り出してもらうことが必要だろうと思います。中大のみんなが積極的に協力することで、世間からの憧れとなるのではないのでしょうか。あの学校にはこんな人がいる、こんな選手がいる、スターがいるとか、そういう理由から受験すること

もあるでしょうから。

——確かにありますね。

鈴木 どれだけ魅力を打ち出せるかです。「中大は資格試験に強い」ということで、司法試験や、公認会計士などの難関国家試験にも力を入れていきます。また、最近では経済界で活躍している先輩が増えてきています。次期経団連の会長は本学出身の御手洗富士夫さんです（この5月就任）。私立大学出身の経団連会長は初めて。先輩たちが活躍することで、中大がもう一度見直されるのではないですか。

頑張れ中大生！

——中大に来る学生は、第二志望の学生も多いと思います。実際に、国公立や早慶を落ちてしまったので中大に来る学生が多い。学長の場合には教員という視点から、理事長の場合には企業の人事という視点からみて、中大生にはどこかコンプレックスを持つているようなイメージがありますか。これから就職活動をする学生には、気になるところです。

永井 私がわかる範囲で、つまりゼミとか少数人数の学生たちに限って

言えば、いま君が言った点で「残念だな」と思う人が多い。

つまり、自己規定をしてしまっている学生が多い。例えば中大に来る学生は、東大などを落ちてくる場合も多い。そこで

自分を規定してしまおう。「18歳の受験勉強で自分の将来を規定するな」と言いたくなるような面があります。その意識を打破してもらいたい。

よく学生には、「これからの4年間をどう送るか」でどのぐらい違いかという話をします。新入生には、「君がいまから4年遡ると中学3年だけけど、中学3年から君の人生をやり直せたら、だいぶ違っていると思わないか」と言うと、アツと思う。それが大学4年間なんです。環境の整っている中大に入って、いろいろなチャンスが提供されているんだから、それをうまく利用すれば、「全然違う自分になれるぞ」ということを言ってチャレンジさせようと思っています。

中大の環境をフルに活用して、この4年間で「実のある人」になり、社会に出て「実をなす人」になってもらいたいんです。無限の可能性があるのに、いろいろな理由をつけて諦める学生が多いのが残念ではない。周りを見ても多いでしょう。

——確かに多いですね。

自己規定せずに目標をもて

鈴木 大切なのは、「一つのきちっとした目標を持つ」ということです。何をしたいのか。何に向かって努力するのか。司法試験を目指すのもいいだろうし、将来起業をするというのでもいいだろう。何でもいから一つ目標を持って、それに邁進するという考えが必要です。何となく毎日過ごしてしまうのが、一番よくないですね。

永井 目標を持って、毎日一生懸命やることと、目標を立てて、そこから逆算して今日は何をする必要があるのかということを考えることが大切です。

——理事長は人事その他で多くの大学の学生に接して、例えば中大生のカラー、「中大生はこういうタイプだな」と、大学別のカラーを感じたことがありますか。

鈴木 そういうことはあまり気にならないですね。私自身が学閥などを気にしなかつたし、そういうことを会社としても意識させなかつた。



もちろん、会社によってはものすごく色が強いところもあります。

——就職試験でペーパーテストはパスしても、その後の集団面接で早慶大生は口八丁手八丁に対して、中大生は話を振られないとモノを言わない、そんな部分で損してしまおうといった話を聞いたことがあります。学内では優秀で活発なのに、外に出た途端に引き気味になる、などと。

永井 偏差値のプレッシャーというか、自縄自縛みたいなものですかね。僕は都立大、立教、早稲田、明治、明学といういろいろな大学の講師を

やりましたが、一緒ですよ。ゼミをやってもどの大学の学生も能力は変わらない。でも、強いて違う点を挙げれば、こう言っては悪いが早稲田の学生はちよつと凶々しいかな。

——僕の知り合いの早大生もそうです。

永井 そういうところは、自分たちが「私学の雄」だという自負と自信から生まれるのでしょうか。まさに、自信のなせる技。中大生にもそれだけ自信を持たせれば、理事長が言われるように全然遜色はない。現実、理事長がこうやって立派に実業界で

活躍されているのだから。社会で競争しても負けないと思えます。

——よく言えば謙虚なのかもしれない。でも、中大生は自信がちよつと足りない……。

永井 負けな

い自信を持つように学生時代に頑張ればよい。

鈴木 会社に入ってから、高卒でもどんだん伸びる人もいるし、東大卒でも全然伸びない人もいる。1回の試験の良し悪しでその人を規定されることはないんです。要は、目標に向かつて、どれだけ突き進めるかではないですか。

——そういう学生が増えてくれば、周りの学生にも影響すると思います。**鈴木** 中大といったら、司法試験や公認会計士の有資格者が多いとか、スポーツではメダリストが多いとか、実業界でも活躍している人たちがいるとか、そういうことが自信につながると思うんです。そういう意味で、中大生はもつと自信を持っていいはず。社会で遅れをとっている訳ではないし、もちろん恥ずかしくない。現役弁護士の中では中大出身者が相当数を占めている。もちろん、公認会計士だつて相当数でしょう。最近でこそちよつと元気がないけれど、

ついで危機感がありますか。

永井 危機感というよりも、頑張らなければと思つています。いま理事長がおつしやるように、自分の人生を考え、目標を持つて努力する。そういう学生をいかに多く社会へ輩出できる大学にするかが勝負です。

また、新人生へは気持ちを入れ替えさせ、受験勉強だけが勉強ではないことをきちんと認識させる。早く頭を切り換えられた学生は大きく育つ。だからこそ、どの学部でも1年生の初年度教育に熱を入れています。出口ではなくて入口が重要なのです。

鈴木 中央大学の学生に持つて欲しい思いは、ほかの大学と二股かけてうまくいかなかったからというふうな変な劣等感を持たないこと。1回の試験で人生が決まるわけではない。世の中に出て成功している先輩方がたくさんいるわけですから。

永井 それに尽きます。中大生の場合はとりわけそれを言いたいですね。

鈴木 やはり、目標を持つて邁進して欲しい。僕は昔、経済学会に入っ



活躍されているのだから。社会で競争しても負けないと思えます。

——よく言えば謙虚なのかもしれない。でも、中大生は自信がちよつと足りない……。

永井 負けな

ていたので、ゼミのみんなで勉強している学校の授業がものすごく楽でした。試験だからといって特別に勉強する必要がなかった。ねじり鉢巻で勉強していたわけではないけれど、みんな楽しんで勉強していると授業よりずっと進んでしまうんです。自分たちが何か目標を持ってきちつとやっていたら、自然と結果があらわれるのではないかな。

——理事長の学生時代、一番の目標は？

鈴木 最初、将来は政治家になるかと考えていたのですが、マスコミ関係に進もうと思って新聞社を受けてダメで、その後、トーハン(当時・東販)という本の取次の会社に入りました。トーハンでは、研究所にいたり、編集部の仕事をしたりしました。その後、流通業界に入ったのですが、振り返ってみると、僕がマスコミに入っていたらどうなっていたのだろう。編集の仕事として、新刊の書評を書く仕事をやっていた。トーハンというバックがあったから、一流の作家や経済人らどんな著者にもイン

タビューできる。僕の年齢で谷崎潤一郎に会っている人は少ないと思います。だから、これもまたわからないんです。

——中大生へのメッセージを、最後にうかがいたいと思います。

鈴木 自分で目標を持ってやって、それで自信を持つということ。必ず失敗はあると思います。だれでも失敗すると落ち込むことはあるけれど、1回の失敗で人生は決まるわけではない。失敗も一つのいい経験だと思うことです。僕でも、ああ、これで終わりかな、これで終わりかなと思うことが今までたくさんありました。が、今日まで何とか生きてきていますから。

「実学ルネッサンス」へ 明るく邁進しよう

永井 少し長くなりますが、私の立場で考えていることをお話ししたいと思います。

中央大学は、明治18年英吉利法学校として創立され、イギリス流の経験主義・合理主義を基礎に、実学

を一つの伝統としてきています。この実学という伝統を、今新たに展開させることが私の使命と考えています。その実学という伝統を發展させた中央大学の将来像は、古代からの哲学・芸術・文学の世界から現在の高度先端的な学問に至る、人類の叡智を具現化したものと考えています。これを本学の「実学ルネッサンス」と私は称しています。そして、新しい世紀に敢然として輝く新しい姿の母校を夢見て、できる限りの努力をしていきたいと考えています。そのためには、すべての構成員の叡智を結集し、すべての卒業生とも連携していかなければならないと思います。

新入生も含めて、すべての学生諸君には、それぞれの場において、全力で学生生活を充実させていくことを望みたいと思います。なぜならば、それが、学生諸君がその叡智を母校中央大学の新しい伝統「実学ルネッサンス」実現へ結集させることになると確信しているからです。

そこで新入生諸君にも、このよう

な君たちの母校となる中央大学の改革を担って欲しいと思います。具体的には、まずは、ファカルティー・リンケージなど学部横断的なプログラムや、インターシップなど社会との提携プログラムにも積極的に参加して欲しいと考えています。大学で学ぶという場は、何も教室だけではありません。この自然に恵まれて環境問題を意識するに最適な環境をもち、1年生から4年生までが一同に集うという都心の大学にはない利点をもつキャンパスという場自体も学ぶ場であります。そして、社会とのいろいろな接点におけるプログラムもまた学ぶ場であります。そのような多様な場を如何に活用するかということによって、君たちの学生生活の充実度が異なるものになっていくと思います。すべての新入生諸君には、それぞれの場において、全力で学生生活を充実させていくことを望みたいと思います。

最後に、ともかくも明るくいきましよう。楽しい学生生活を送りましよう。